経済港湾委員会行政調査報告

経済港湾委員会委員長　　徳　山　敏　子

１．　日程および参加者

令和４年８月29日（月）~8月31日（水）

経済港湾委員会委員11名、事務局２名

2.　調査項目

（１）沖縄市東部海浜開発計画について

（２）沖縄アリーナについて

（３）横浜市国際海上コンテナターミナル再編成事業について

（４）横浜市都市型循環式ロープウェイについて

（５）横浜ベイサイドマリーナについて

３．委員長所見

（１）沖縄市東部海浜開発計画について

沖縄市東部海浜開発の背景には、沖縄市と県が長年抱える課題の解決策を模索しながら市民も巻き込んで何度もワークショップで議論を交わし、開発へと実を結んだと伺いました。

まず、沖縄市では年々人口が増加している一方で失業率が高く、市面積の約３５％を占める米軍基地等の存在によって新たな開発用地が不足しており、生活や地域振興に様々な影響を及ぼしているとのことであります。

そのような状況から、那覇市を中心とする西海岸地域への都市機能・商業機能が集中する中、本島中部圏東海岸地域の活力の低下が著しいなどの沖縄県の問題を解決するため、国・県・市が連携してこの事業の展開に至ったと伺いました。

開発の基本方針は「スポーツ」「健康・医療」「交流」をメインテーマとした開発を目指し、海に囲まれた緑豊かな環境の中で、スポーツや医療・保養などを通じて県民や市民そして観光客が交流・健康づくりを行える空間を創出できるスポーツコンベンションの拠点になるよう取り組まれています。

その一部である、約９００メートル続く人工ビーチ「潮乃森（しおのもり）ロングビーチ」を視察させて頂きました。国が担う国際物流ターミナル整備事業におい

て、新港地区泊地の浚渫土砂を中城港湾の埋め立てに利活用し人工ビーチの整備を進めていました。人工ビーチを整備するにあたっては、ビーチの一部に人の出入りを制限する生物聖域ゾーンを設置し、野鳥や絶滅危惧種のトカゲハゼなどの産卵期や、クビレミドロ等の海藻保護のため年に１／４は工事を休止すると伺いました。自然環境に配慮しながら整備をされておられることに感銘し、地元市民の皆さんの思いを行政関係者がしっかり受け止めて事業を進めておられることが非常に印象に残りました。また、このような取り組みは、野鳥の生息空間の創出することにもつながり、次世代の子供たちの環境学習の場としても活用されており、すばらしい取り組みであると感じました。

（２）沖縄アリーナについて

沖縄アリーナは「未来を創り地域を活性化するアリーナ」をコンセプトに、沖縄市コザ運動公園内に２０２１年に建設され、「沖縄をもっと楽しく」という使命のもと、観る側と魅せる側が一体となり相乗効果を生み出す施設を目指し、多種多様なイベント会場となっています。

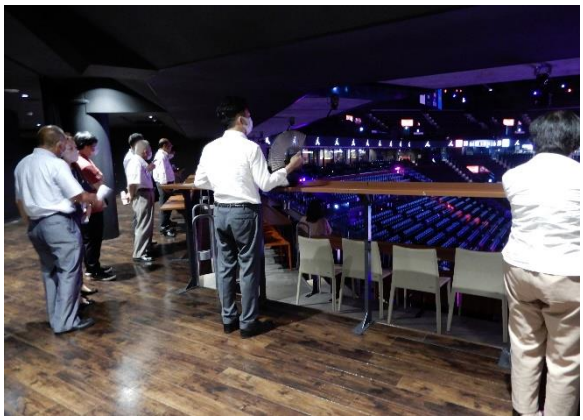
来年には、「FIBA バスケットボールワールドカップ２０２３」の予選ラウンドの開催も予定されているそうです。

県内最大のイベントフロアはもとより、おもてなしを実現できるスイートルームや各種ラウンジ、５１０インチのメガヴィジョン、６０台の４Ｋカメラ、すり鉢状に配置された観光客席は、最上階からもイベントフロアが近くに感じられるよう配置され、どの席からでも楽しめる仕組み等、最先端技術が注ぎ込まれており、驚きの連続でした。

当初、視察の翌日に FIBA ワールドカップ２０２３アジア地区予選の試合があるため、アリーナの中には入れないということでしたが、ご配慮いただき、アリーナ

内を見学させていただくことができました。

神戸市は視察させていただいた沖縄のアリーナと同程度の１万人規模のアリーナを、神戸空港からわずか２０分程度の所に建設予定でありますから、しっかり地の利を生かし、国内はもとより、海外からの集客や雇用創出にもつなげていけるのではないかと実感いたしました。



（３）国際コンテナターミナル再編成整備事業について

横浜港は東京湾の西北側に位置し、風・潮流・干満差などの自然条件によって荷役が制限されることが極めて少なく、船舶の入港に最適な条件の整った天然の良港であります。また、東京湾の湾口に近いことから、湾奥の他港に寄港するより往復で約２時間短縮できることや、各消費地へのアクセス道路が整備されていることなどにより、船社・荷主の方々にとって理想定期な物流モデルを構築することができ、その上、東アジアと北米西岸とを結ぶ大圏コースからの偏差が小さいことや、北米航路におけるラスト・ファーストポートであるという地理的優位性を持っています。

横浜港は、「民」の視点の港湾運営、コスト低減策、国内貨物の集荷などが評価され、平成２２年に、京浜港として国際コンテナ戦略港湾に選定されました。「国際コンテナ戦略港湾」として、急速に進展する船舶の大型化に対応し、基幹航路の維持・拡大を図るため、コンテナターミナルの再編成やロジスティクス拠点の形成等によりコンテナ取扱機能の強化を図っておられ、東日本最大の自動車取扱拠点である大黒ふ頭では、岸壁改良等により１１隻の大型自動車専用船の同時着眼を可能とするなど、自動車取扱機能強化に着手されており、港を抱える神戸市も学ぶべき点が大いにあると感じました。

世界の船会社は、スケールメリットによる輸送コスト低減のため、コンテナ船の大型化を進めており（現在、世界で就航しているコンテナ船の最大船型は全長４０

０m、２万４千個となっている)、南本牧ふ頭では、それらに対応するため、国内最大・唯一の水深１８m 岸壁を有する高規格コンテナターミナルの整備を進め、２０２１年４月に全面供用し、多方面の航路の船舶が船型やスケジュールなどに応じ施設全体を柔軟に利用できる画期的な運用が実現し、今後さらに取扱貨物の増大と効率的な取扱いに向けて、新たにコンテナターミナルの整備を進めていくと伺い、世界のニーズに合わせたこの取り組みは神戸市にとっても参考になると感じました。

（４）都市型循環式ロープウェイ「YOKOHAMA　AIR　CABIN」について

平成２９年「まちを楽しむ多彩な交通の充実」を具現化し推進するため、まちの賑わいづくりに寄与する「様々な交通モードの導入」や「新たな技術に基づく事業展開」などについて、民間事業者等に幅広く提案を募集し、平成３０年、この事業が水際エリアにおける「ロープウエイ」として選定され、令和３年４月より開業し、新たな観光スポットとして、多くのメディアで取り上げられた。

また、周辺のホテルや商業施設と連携した取り組みにより、相乗効果もみられ開業１周年には年間１２０万人を突破したと伺いました。

本市では「神戸布引ロープウェイ」や「六甲有馬ロープウェー」など、地形を生かし山麓と山上を結びつける観光スポットはありますが、横浜の場合、橋を歩く代わりにゴンドラに乗るという、川をまたぐ形で、わずか５分間の乗車時間に眼前や四方に港や街並みが広がり、このおしゃれな移動手段と新たな観光スポットに感心いたしました。

神戸市も各突堤とハーバーランドをつなぐ回遊性のある魅力的なスポットに十分なり得るのではないかと感じました。

（５）横浜ベイサイドマリーナについて

アジア最大級の横浜ベイサイドマリーナは、約１，４００隻の大小様々な船が並び、壮観な眺めでした。レンタルのボートもあり、ベイサイドにはアウトレットモールや飲食・ショッピング街も隣接しており、都心から約１時間の好アクセスにより、レジャーや観光スポットとしても親しまれているようです。

全区画が海上係留方式のため、２４時間３６５日いつでもご自身の船に乗船でき船中泊も可能ということで、特にこの約２年半に及ぶコロナ禍では、出港せず停泊したまま東京湾の夜景を眺めたり、非日常を楽しむ方々も増えたと伺いました。

また、船の大型化も進み、係留区画の再整備も進められておられ、横浜同様に港を有する神戸市においても、まだまだ港の再整備には伸びしろがあると痛切し、ウオーターフロント事業に活用すべきと感じました。

最後に、新型コロナウイルス感染が日ごとに拡大する中での行政視察となりました。中止にすべきかどうするかという状況が続く中、当日まで体調管理を万全に視察に臨んでいただきました委員の皆様はじめ事務局の皆様には、大変お世話になりました。特に事務局の方々には、受け入れ先である沖縄市と横浜市の関係者に着々と丁寧に連携して頂き、無事視察を終えることができましたことに心より感謝申し上げます。